

「国際周期表年 2019」を みんなで 盛り上げていこう!



玉尾 皓平

『自然も暮らしもすべて元素記号で書かれている』——これは、筆者も制作にかかわり、文部科学省から発行されている「一家に1枚周期表」の上部に掲げられている標語である。私たちの身体はもとより、地球上の身のまわりのものから宇宙の果てまで、すべて元素でできていることが表現されている。人類社会の発展に貢献する未来物質を創り続けてきた科学者たちにとって、周期表はその思考の原点ともいえる存在である。

2019年はロシアの化学者ドミトリー・メンデレーエフ (Dmitrij I. Mendeleev) が、この周期表の原型である元素周期律を発見してから150周年にあたる。また、2016年11月には理研グループによって合成・発見された113番元素ニホニウム(Nh)を含む四つの新元素名が確定して周期表第7周期の118番までが完成した。これらを記念して、国際連合とUNESCO(国際連合教育科学文化機関)によって「国際周期表年 2019: International Year of the Periodic Table of Chemical Elements 2019; IYPT2019」が宣言された¹⁾。偶然にも、IUPAC(国際純正・応用化学連合)の設立100周年と重なっていることもあり、国際的な公式祝賀行事はIUPACが中心となって計画されている。開会式がパリ(1月29日)とロシア(2月8日:メンデレーエフの誕生日)で開催され、12月5日に日本(東京)で閉会式が行われる。また、“Periodic Table of Younger Chemists²⁾”と銘打ったプログラムは、40歳以下の学生、研究者に元素一つずつを割り振って、118人の若者で周期表をつくろう、というユニークな取り組みである。毎月、8~9個の元素名が示され、推薦を受けつける方式で、2019年5月が最後の締切である。日本からも

受賞者ができることを期待している。

国内では、日本学術会議IUPAC分科会、IYPT記念事業検討分科会〔委員長:酒井 健教授(九州大学)〕および日本化学会内に設置された筆者が実行委員長を務める国際周期表年実行委員会を中心に活動方針が検討されてきた。国内の関連行事は、実行委員会幹事の山内 薫教授(東京大学)を中心に開設されたウェブサイト³⁾にまとめられている。

おもな公式行事として、前述の閉会式のほか、2月23日に記念式典(国内開会式に相当)が学術会議で開かれる⁴⁾。3月17日には、日本化学会(甲南大学)と日本物理学会(九州大学)の春季年会連携シンポジウムとして、両会場を映像でつなぐ二元国際周期表年記念講演会を計画している。

実行委員会のウェブサイトには、年間を通じて次の企画、①中高生・大学生を対象にした「私たちの元素——エッセイコンテスト」、②企業や研究所などを対象とした「私たちの元素——産学からのメッセージ」、③周期表に関連した活動の提案コーナーの三つを予定している。まず①では、若い人たちから元素にまつわる多数のエッセイの応募を期待している。

②については、各企業や研究所が関連深い元素を周期表で選んでクリックして、その事業や研究開発の特徴や成果を広告という形で広報してもらおうとする企画である。そして③では、全国津々浦々からのユニークな企画の登録を期待している。これら以外でも、サイエンスアゴラなどでのイベントもぜひ計画したいと

思っている。

国際周期表年2019は化学に留まることなく、自然科学全分野に関係する。この活動を通じて、科学の進歩と基盤産業の振興、そして次世代の人材育成に役立てていければと願っている。ぜひ、みなさんもさまざまなイベントに参加されて、国際周期表年2019をともに祝い、盛り上げようではありませんか。

1) IYPT2019 ホームページ (<https://www.iypt2019.org/>)。 2) IUPAC ホームページ, “Periodic Table of Younger Chemists” (<https://iupac.org/100/pt-of-chemist/>)。 3) 国際周期表年実行委員会ホームページ (<https://iypt.jp>)。 4) 2/23 記念シンポジウム (<http://iypt2019.jp/custom.html>)。

たまお・こうへい ● 京都大学名誉教授。(公財)豊田理化学研究所 所長。1942年香川県生まれ。1970年京都大学大学院工学研究科博士課程修了。〈研究テーマ〉有機元素化学, 元素戦略。〈趣味〉料理。